

氏名	馬場洋介		
学位の種類	博士(人間科学)		
学位記番号	博甲第185号		
学位授与の日付	2014年3月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文の題目	リーマンショック後の中高年男性の失業体験と心理的援助 ー再就職支援会社におけるメンタルとキャリアの統合的視点ー		
論文審査委員	主査	神奈川大学 教授	新田 泰生
	副査	神奈川大学 教授	下田 節夫
	副査	神奈川大学 教授	杉山 崇
	副査	神奈川大学 教授	瀬戸 正弘
	副査	神奈川大学 教授	荻野 佳代子

【論文内容の要旨】

I 本論文の問題意識と目的

失業期間が長期化している中高年男性失業者が失業をどのように体験しているのか、および、うつ病等の精神疾患を抱えながら再就職活動をしている失業者がどのような体験をしているのかについて焦点を当てた研究はほとんど少ない。また、中高年男性の再就職支援を担うキャリアカウンセラーは、心理的援助を求められているが十分にできていない状況でもあるが、再就職支援会社のキャリアカウンセラーが中高年男性失業者に対してどのような心理的援助をしているのかについて焦点を当てた研究はほとんど少ない。中高年男性失業者の支援については、再就職の現実的な支援だけでなく、臨床心理的な支援も必要であり、メンタル面とキャリア面を統合した支援が必要という視点で調査を進める。

本論文は、以上の問題意識から三つの研究を実施し、以下にそれらの目的を記す。第一に、現在、再就職支援会社で支援を受けている、うつ病等の精神疾患を抱えている中高年男性失業者が現在の失業をどのように体験しているのか、について明らかにすることを目的としている。第二に、現在、再就職支援会社で支援を受けている中高年男性の長期失業者が現在の失業をどのように体験しているのか、について明らかにすることを目的としている。第三に、再就職支援会社のキャリアカウンセラーが中高年男性失業者に対してどのような心理的援助をしているのか、について明らかにすることを目的としている。そして、それと同時に、以上の3つの対象に基づき、中高年男性失業者の支援モデルを提示することが目的である。

II 本論文の章別構成

第1章. はじめに～研究者の問題意識～

第2章. 問題と目的

I. 問題の背景、 II. 先行研究概観、 III. 本研究の目的

第3章. 精神疾患を抱えた中高年男性失業者の失業体験のプロセス研究

I. 問題意識、II. 目的

III. 方法

1. データの範囲、2. 分析方法、3. 分析テーマと分析焦点者、4. 分析手順と分析ワークシート、5. 概念<蓄積された覚悟>の生成過程

IV. 結果と考察

1. 結果図、2. ストーリーライン、3. コアカテゴリー【覚悟と不安を抱えながらの再就職の準備】について、4. コアカテゴリー【再発の不安により選択肢が狭まる辛さ】について、5. コアカテゴリー【限られたソーシャルサポートの支え】について

V. 総合考察

1. 多軸の喪失感を受けとめる支援、2. 自己能力の気づきを促す支援、3. 限られたソーシャルサポートを意識した支援

VI. 本研究の限界と今後の展望

1. 本研究の課題、2. 今後の展望

第4章. 中高年男性長期失業者（1年以上）の失業体験のプロセス研究

I. 問題意識、II. 目的

III. 方法

1. データの範囲、2. 分析方法、3. 分析テーマと分析焦点者、4. 分析手順と分析ワークシート、5. 概念<追い込まれて最後の一线が浮き彫りにされる>の生成過程

IV. 結果と考察

1. 結果図、2. ストーリーライン、3. コアカテゴリー【追い込まれながらの幕引き】について、4. コアカテゴリー【出口が無く暗闇を歩く】について、5. コアカテゴリー【受動的二人三脚】について、6. コアカテゴリー【意図しない家族・会社時間の逆転】について

V. 総合考察

1. 『出口』が見えない絶望感を受けとめる支援、2. 過去の『固い物語』から将来の『柔らかい物語』へ転換する支援

VI. 本研究の限界と今後の展望

1. 本研究の課題、2. 今後の展望

第5章. 再就職支援会社のベテランキャリアカウンセラーの心理的援助のプロセス研究

I. 問題意識、II. 目的

III. 方法

1. データの範囲、2. 分析方法、3. 分析テーマと分析焦点者、4. 分析手順と分析ワークシート、5. 概念<本音の尊重>の生成過程

IV. 結果と考察

1. 結果図、2. ストーリーライン、3. コアカテゴリー【求職市場に一步に踏み出す準備を整える】について、4. コアカテゴリー【厳しさの循環を受けとめ、活動を促す】について、5. コアカテゴリー【何とか再就職にたどり着く】について

V. 総合考察

1. <負の感情を受けとめる>支援、2. キャリアに真摯に向き合う支援、3. 不合格による自信喪失を丁寧に受けとめる支援

VI. 本研究の限界と今後の展望

1. 本研究の課題、2. 今後の展望

第6章. 3つの研究の総合考察

I. 総合考察

1. 失業中の困難な現実を受け入れるプロセスのメンタル面とキャリア面の統合した支援、2. 中高年男性失業者の心理的援助の担い手としての臨床心理士について

II. 本研究の限界と今後の展望

1. 本研究の課題、2. 今後の展望

III 本論文の研究方法

本研究で得られた逐語データは、M-GTAにより質的に分析した。M-GTAは木下(2003)によって考案された質的研究法であり、データに密着した継続比較分析により、医療、介護、福祉等のヒューマンサービス領域の研究テーマに限定された範囲において、説明力に優れた動的理論を生成する質的研究手法である。この研究法は、相互作用性・プロセス性を持った人間行動に関して、説明力があり予測にも有効とされる。また、分析ワークシート等の具体的手順、結果の応用等、一連のプロセス自体が、研究結果の“検証”になり得るという立場が明示されており、研究結果の現場での応用を視野に入れている本研究の目的とも合致した。

分析手順については、以下のように進めた。まず、前述した分析テーマに照らし合わせて、自らの失業体験を詳細に語った人のうち、豊かな内容を語っており、研究者が最も着目した人の逐語を繰り返し読み、分析することから始めた。次に、研究者が最初に重要と思い、着目した文脈の語りを検討し、その意味の解釈に沿って他の文脈や他の人の逐語データについて類似例を検討した。そして、該当すると思われるヴァリエーションを抽出し、それらを総称する定義を記述し、概念名を決めて分析ワークシートを記述した。また、分析ワークシートには、対極例や検討した事項等を理論的メモとして記述した。さらに、最初概念とは逆のヴァリエーションを抽出し分析ワークシートを作成した。このように、比較分析を継続的に行った。また、研究結果の信頼性、妥当性を高めるために、分析段階で共同分析者のゼミ大学院生と繰り返しディスカッションを行い、指導教授のスーパーヴィジョンを受け、分析を行った。

IV 本論文の概要

本論文の概要を、三つの研究毎に、以下に概説する。

I. 精神疾患を抱えた中高年男性失業者を対象とした研究

1 M-GTAのストーリー・ライン

分析結果、再就職支援会社で支援を受けている精神疾患を抱えた中高年男性失業者が発症から再就職に向けて直面する現実を受け入れていくプロセスとは、精神疾患の発症を契機に、組織、仕事から引き剥がされる体験を経る中でリストラ宣告を受け、【覚悟と不安を抱えながらの再就職の準備】をして再就職活動に臨み、精神疾患の【再発の不安により選択肢が狭まる辛さ】を抱えながらも、家族、仲間、および、キャリアカウンセラー等、信頼できる【限られたソーシャルサポートの支え】を受けて、自らの仕事観等を転換しながら、直面する厳しい現実を受け入れていくプロセスであることが示唆された。

2. 精神疾患を抱えた中高年男性失業者を支援する心理的援助の視点

(1) 多軸の喪失感を受け止めながらの支援

多軸の喪失感とは、仕事軸では、責任ある第一線の仕事から外されてしまう喪失感であり、会社組織軸では、愛着を持って所属してきた会社という場を失う喪失感等である。この喪失感を受け止めながらの支援の必要性が示唆された。

(2) <今の自分でもできることを見出す>支援

この<今の自分でもできることを見出す>が、多軸の喪失感や再発の不安を抱えながら、自己肯定感を持って再就職活動に臨める原動力になることが示唆された。

(3) 限られたソーシャルサポートを意識した支援

精神疾患の発症を契機に、社会との関わりが減退する中、ソーシャルサポートの担い手の中でも再就職支援会社のキャリアカウンセラーの役割は大きい。その様々な支援は、<再就職実現の不安>や精神疾患の再発の不安等、複数の不安を抱えながら再就職活動をしている中高年失業者に心理的援助につながっていることが示唆された。

II. 失業期間が長期化（1年以上）した中高年男性失業者の研究

1. M-GTAのストーリー・ライン

分析結果、再就職支援会社で支援を受けている、失業期間1年以上の中高年男性失業者が、再就職における困難を受け入れていくプロセスとは、一定の愛着もあり、一方で心理的距離感を感じている所属していた会社からリストラ宣告を受けて、残っても厳しい選択肢しかないという【追い込まれながらの幕引き】を短期間で意思決定をした退職後、再就職支援会社の担当キャリアカウンセラーを触媒として活かすような、【受動的二人三脚】の支援を受けて、【意図しない家族・会社時間の逆転】等の人生における価値観の転換を図りながら、【出口無き暗闇を歩く】中で現実的な出口を試行錯誤しながら活動して、様々な困難を受け入れていくプロセスであることが示唆された。

2. 失業期間の長期化している中高年男性失業者を支援する心理的援助の視点

(1) 出口が見えない絶望感を受けとめる

失業期間が長期化した中高年男性失業者は【出口無き暗闇を歩く】ように、再就職の『出口』の光が見えない中を歩んでいる。このような中高年男性失業者を支援するためには、不合格が続く辛さを、感じ寄り添いながら、支援することが重要である。キャリアカウンセラーは、キャリアチェンジを促す等、『意に反する』提案をする局面もあるので受け止め方に注意を払いながら支援することの必要性が示唆された。

(2) 過去の『固い物語』から将来の『柔らかい物語』へ転換する支援

高橋(2010)は、中高年失業者にとって、失業の意味を長期的視野から問い直す必要性を挙げており、<追い込まれて最後の一線が浮き彫りにされる>プロセスは、これまでのキャリアを振り返って、これからのキャリアを考える上で、長期的視野から『譲れないもの』が明確化するプロセスであると言えよう。再就職支援会社のキャリアカウンセラーの役割として、<追い込まれて最後の一線が浮き彫りにされる>プロセスの中で、新田(2002)の言う、過去の『固い物語』から将来の『柔らかい物語』へ転換する支援も必要であることが示唆された。

III. 再就職支援会社で支援をしているベテランキャリアカウンセラーの研究

1. M-GTAのストーリー・ライン

分析結果、再就職支援会社で支援している、ベテランキャリアカウンセラーは、再就職に向けて活動しようとしている中高年失業者に対して、【同じ目線とともに再就職に歩み出す】ことをしながら、中高年失業者が再就職という未体験な活動をする不安を抱えながら、負の感情を受け止めつつ、過去のキャリアを振り返りながら、再就職活動に一步踏み出す支援をする。そして、応募しても何度も不合格を体験して、自信を喪失している中高年男性失業者に対して、【厳しさの循環を受けとめ、活動を促す】ことをしていくような支援をして、やがて、その状態から抜け出して、【何とか再就職にたどり着く】支援をして、中高年男性失業者の心理的援助をしていくプロセスである

ことが示唆された。

2. 中高年男性失業者を支援するキャリアカウンセラーの心理的援助の視点

(1) <負の感情を受けとめる>支援

ベテランキャリアカウンセラーは、リストラの宣告を受けて退職に至った中高年男性失業者が持つ、長年の間、所属していた会社に対する裏切られた感情、および、これまで転職活動をしたこともなく、再就職活動をしていくことに対して様々な不安を抱えていること等、多軸の負の感情を受けとめていることが示唆された。

(2) キャリアに真摯に向き合う支援

諸富(2010)は、カウンセラーを目指すための三つの条件として、『本気で生きる』『自分を深く見つめる』『クライアントの傍らにとどまり続ける』を挙げている。中高年男性失業者の活動を前に進めるためには、中高年男性失業者が、自分がやりがいを持って仕事に取り組んでいた過去のキャリアを振り返り、<往時の自信の回復>により、それを言語化して、自らの強み、スキル等に分解して整理することにより、自己肯定感が醸成される。キャリアカウンセラーは、それを支援する必要性が示唆された。

(3) 不合格による自信喪失を丁寧に受けとめる支援

求職市場において、中高年男性失業者は、不利な状況に追い込まれている。したがって、再就職活動では、不合格が度重なる可能性が高く、心理的負荷も相当高い。中高年男性失業者を支援するためには、不合格の受けとめ方の転換を図り、自信喪失を活動継続の原動力に変えていく支援の必要性が示唆された。

IV. 3つの研究の総合考察

先行研究で高橋(2010)が、失業期間をレトロスペクティブに振り返った語りのデータをM-GTAで分析して中高年男性の失業体験の仮説モデルを提示したが、インタビュー調査対象者の離職後の経過年数は平均4.7年であり、レトロスペクティブの語りの中でのモデルという限界もある。本研究では、それぞれの研究において『今、まさに、失業を経験している人は現実にはどのような支援が必要なのか』という問題意識でメンタル面とキャリア面の統合的視点で研究を分析し考察している。

1. 失業中の困難な現実を受け入れるプロセスのメンタル面とキャリア面の統合した

支援

廣川(2010)も総論としてのメンタル面とキャリア面の統合的視点は指摘してはいるものの、『心理的援助のどのプロセスの中で、具体的にどのような、メンタル面とキャリア面の統合的視点が必要かどうか』までの細かなプロセスの指摘されていなかった。今回の研究の成果として、M-GTAを使ったプロセス分析により、心理的援助を受ける側、心理的援助をする側のそれぞれについて、受け入れる困難な現実のプロセスごとに、メンタル面の支援とキャリア面の支援が統合して絡み合い相互作用しながらのプロセスであることが示唆された。

2. 中高年男性失業者の心理的援助の担い手についての臨床心理士について

中高年男性失業者の心理的援助、および、キャリア上のパラダイム転換の支援において、臨床心理的アプローチで支援できる、臨床心理士が持つ機能の役割は大きいことが示唆された。

【論文審査の結果の要旨】

産業心理臨床領域は、経済の激動を受けて、従来の心理臨床理論モデルだけでは通用しない心理臨床現場に真っ先に直面している臨床領域である。産業心理臨床領域こそは、日々の臨床記録、面接記録の中から方法論を意識しながら、新しい臨床モデルを構成していく研究方法が望まれる領域の一つであると言えよう。

特に慣例化していた終身雇用から、リストラが実施されるようになった近年の動向の中で、失業者の問題は、まさに最先端の心理臨床現場の一つであると言える。高橋(2010)は「日本においては、近年になるまで心理学的アプローチによる失業研究はほとんど行われてこなかった」と、我が国における、心理学的アプローチの失業研究の貧困さを指摘している。ましてや、再就職支援会社における失業者への心理的支援問題は、馬場氏の本論文以外には、ほとんど類例を見ないに等しいと言えよう。

馬場氏の本論文は、以下の点で、高く評価できるものと思われる。

- 1 再就職支援会社における失業者への心理的支援問題というニーズの高い最先端のテーマにおいて、新しい知見を提示している。
- 2 データーが限られた状況にある最先端の研究フィールドの中で、M-G-T-Aという質的研究法を用いて、新しい知見を提示している。
- 3 失業者への心理的支援において、従来関連性があまり研究されてこなかったキャリア支援とメンタル支援の関係性が明らかにされた。

馬場氏の研究の課題も挙げておきたい。支援会社1社を対象というサンプリングの範囲の問題があり、今後の研究課題となる。

さらに副査からは、少ないとはいえ先行研究との比較の更なる充実、三つの研究の関連性の探究などの指摘がなされたが、研究のモチーフ、意義、方法、成果において高い評価を得ている。

総合的に見て、研究目的にあった適切な研究法・分析法が採用され、丁寧な分析の結果・考察により有益な知見が見いだされた点が高く評価できる。

以上から、博士論文の成果においては、適切・有意義な内容を備えていること、最終試験においては、精深な学識と研究能力を備えていることを審査員全員が認め、合格と認定した。